
現実ゲーム

雄輔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現実ゲーム

【Nコード】

N9661C

【作者名】

雄輔

【あらすじ】

10年一回行われるゲーム。それにまきこまれた、主人公の物語です。

1・始まり

「校長。遂にあれから、10年が経ちました。」

「そうか。遂にあの出来事が、繰り返されるのか。」

「しょうがないですよ。これがこの学校を建てた時に決まった事何ですから。保護者には、同意を得ていますし、問題はありませんよ。」

「しょうがないか…。」

「みんなが生きて戻って来る事を願いましょう。それとこれは生徒にはないですよ。」

「分かってる。」

「それならば、いいです。ゲームの始まりは4月4日。期間は一カ月です。」

「分かった。」

「では、私は準備をして参ります。」

ガチャン

「ふう〜。なんでこんな事になってしまったのだろうか？」

「いつてきます！」

ガチャン

「ヤベエー。遅刻だ〜！」 「入学式に遅刻なんてしたら、

先生に目つけられる〜。」

ガラガラ

「すいません、遅刻しました！」

「分かった。取り敢えず、座りなさい。」

「わかりました。」

ふう〜。つかれた。

「え、今から自己紹介してもらおう。一番からしていけ！」
「クラス10人で、8クラスある。」

「一番。新藤 進です。特技は気配を消す事です。」
怖いな。

「二番。飯塚 理彩です。特技は、みんなと仲良くする事だよ。みんな、よろしくね。」
やたら、元気な女だ。

「三番。六山 颯流。特技は岩を砕く事だ。」
体にあつた、特技だ。なんかこのクラス、個性派多いな。

「四番。あの石田 武宏です。あの特技は特にありません。
あのよろしくお願いします。」

なんか苛められキャラ的なのが来たよ。
あつ。次俺の番だ。

「五番。介堂 光です。」

特技は足が速い事です。」

「六番。先崎 五郎です。特技は空手です。」
空手か。ちなみに、俺は剣道やってる。

「七番。太田 俊夫です。特技は弓道です。」

「八番。灯籠 麗奈です。特技は勉強ですわ。」

明らかお嬢様だな。ああいうのは、うるさいから近付かない方がいいな。

「九番。鈴介 漸侍。特技は麗奈様を守る事。麗奈様に手を
だす奴は斬る。」

名前が変なので、ふりがなを付けると、りんかい ぜんじ、
だよ。

「十番。稲垣 佳奈です。よろしくね。特技は柔道です。」
武道系の人が多いな。

「これで、全員だな。次は全校集会だ。全員、体育館に行け。
以上だ。」

体育館って、何処にあるんだ？

「ねえ。体育館って何処にあんの？」

隣の席の稲垣さんに聞いてみた。

「先生さっき言ってたよ。それとも、私と喋りたいの？」

こいつに話し掛けんの止めとけばよかった。

「いや、俺さっき遅刻して来たから、先生の話ほとんど聞いてないから。」

「ああ。そういえば、あんた遅刻わね。説明するの面倒くさいから、着いてきてね。」

「分かったよ。」

意外にいい奴だな。

「意外は余計よ。」

叩かれた。

「口にだして言ってたよ。」

そういうことか。

「じゃあ、行こっか。」

「ああ。」

マジかよ！帰らせてえ〜。
(前書き)

久しぶりの投稿です。まあ、のんびりいきます。

マジかよ！帰りてえ〜。

「ああ〜。早く帰りてえ〜。」

マジねみい！

「あんた、さつきからそればつか言っで、うるさい。」

「はいはい。すみませんね。」

早く終わんねえ〜かな。

「静かに！」

やっと、始まったよ。

「え〜、これから君達にあるゲームをやってもらう。」

はあ？何言ってるんですか？オッサン。

「期間は1ヶ月。ルールは、後で説明する。」

ゲームってなんだよ。ふざけんなよ。帰ろっかな。

「一つ言っておく。これは強制参加だ。しかも、もう始まっている。窓の外を見てみるがいい。」

窓の外を見ると、そこには道路や家、車、人あるはずの物がなく、その代わり広大な密林が聳えたっていた。

「さあ。状況を知ってもらった所で、ルールの説明だ。」

「待てよ！」

「ふざけんなよ！」

「家にかえせよ！」

「親に言っで、廃校にするぞ！」

みんな、いろいろと言っていますなあ〜。ていうか、俺はどうなの？

「静かに！親は事前に連絡してある。」

マジかよ。1ヶ月も家に帰れないなんて…

「ルール説明だ。」

まず、みんな見たように外は森だ。

森には、みんなが知らない動物いや、モンスターと言った方がいい

か。モンスターがいる。モンスター達は森入って来た奴を食べるだろう。だが、かと言って学校内に居るだけでは、飲食できない。なので森へ行き、モンスターを倒し、その肉を食べる。水も森の何処かにある。それで、1ヶ月間生き延びたものが帰れる。分かったな。質問は拒否する！以上だ。」

と言うと、オッサンは消えた。って、消えたよ！おかしいだろ！なんで、危ないゲームやんなきゃ行けないんだよ！

「なあ。どうする？」

一応聞いてみた。

「あんた！どうするって、どうしようもないじゃん！」 怒
ってる。」

「ごめん。」

謝って、逃げた。

迷子ですー！っと明るく言ってみる。(前書き)

名前を忘れそうです…。まあ頑張りますけど。

迷子です！っと明るく言ってみる。

さあ〜て、これからどうするかな？

さつき、あいつから逃げたのはいいが、ここが何処だか分からない。

「参ったなあ〜。」

階段下りたから、上がれば教室戻れっかな？

「ねえ。」

階段上がるかな。

「ねえ。」

何か聞こえたような気がする。

「ねえ！」

おお〜。びっくりした。

「どうしたんですか？」

後ろにいたのは、女の子だ。 どうかで見たことあるような…

「どこかで会いましたっけ？」

「え〜！覚えてないの？同じクラスの飯塚 理彩だよ！私の名前忘れるなんて…」 ああ！そういえばそんな奴いたな。

「ごめん。ごめん。」

「許してあげるよ。それよりこんな所で何やってんの？みんな教室で待ってるよ。」

「じゃあ、飯塚さんは呼びにきてくれたの？」

「うん。そうだよ。みんな待たせると悪いから行こ。」

「そうだね。」

また、あいつに何言われるかわかったもんじゃないからな。それにしても、飯塚さんは優しいなあ。

誰かさんとはお間違いだよ。

ガラガラ

「おそ〜い。何してたの？」

「別に。」

「ちよつと、何よ！その態度！遅れてきたくせに！」

まださっきのこと怒ってんのか？

「分かった。分かった。ごめんね。けど、あんま怒ってる嫌われちゃうよ。」

「大きなお世話よ！もう知らない！」

ちよつと言い過ぎたかな？まあ、うるさいのはこん位言っといた方がいいんだけど。

迷子です！っと思える言ってみる。(後書き)

じゃあね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9661c/>

現実ゲーム

2010年10月28日04時06分発行